様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２２６８

研究課題名（和文）美術大学におけるプロジェクト参加型実技教育の研究

研究課題名（英文）A Study on Participatory and Project-based Art Education at Art Schools

研究代表者
荒木　慎也（Araki, Shinya）

成城大学・法学部・非常勤講師

研究者番号：６０８１６３７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本国内の地域芸術祭や、美術系大学のプロジェクトに従事するボランティア参加者に注目し、参加者の内訳の推移、活動内容、参加動機、そして活動への参加が参加者たちに与える教育効果を調査した。本研究の結果、美術系学生のボランティア参加が2010年代に大幅に減少した一方で、地域芸術祭においては、参加者の主体が、日本国内の若者から、日本の中高年と台湾・香港からの若者に推移したことが明らかになった。また、活動内容が参加者の自発性よりも中央の指示を重視する形式を重視していること、さらに、ボランティア参加の動機が、活動を余暇の一種とみなすボランツーリズム的な要素を含んでいることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
地域芸術祭や大学のプロジェクトに関する従来の研究では、運営主体と地域住民に焦点が当てられることが多く、外部から参加して一時的に地域に関与するボランティア参加者についての先行研究がほとんど存在しなかった。本研究では、従来では地域振興や他者奉仕などの動機から語れることの多かったボランティア活動を、ボランツーリズム体験を追求する参加者自身の動機づけから解明した点に、学術的な発見が見られる。また、ボランティアの参加者の内訳や活動様態は、2000年代初頭と2010年代、さらにコロナ禍以降で大きく異なっている。刻一刻と変化するボランティア活動の現状を調査し、記録に残したことも、本研究の成果である。

研究成果の概要（英文）：This study examines the changing demographics of participants, their activities, their motivations, and the educational outcomes they receive from their activities with a particular focus on participants in volunteer activities at regional art festivals and art school projects in Japan. The results of my research show the notable changes in participant demographics, particularly the decline in volunteer involvement of art school students during the 2010s. Instead, the primary participants in regional art festivals have shifted from young individuals from Japan to middle-aged Japanese and young people from Taiwan and Hong Kong. Additionally, my study also demonstrates that volunteer activities at regional art festivals emphasize centralized management rather than the spontaneity of participants. Moreover, volunteers' motivations include aspects of voluntourism, in which participants view volunteer activities as a form of leisure time.

研究分野：美術教育学

キーワード：美術教育　地域芸術祭　ボランティア　美術系大学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2000 年に新潟県十日町市で第一回大地の芸術祭が開催されて以降、現在までに日本各地で地域創生や観光誘致の目的で地域芸術祭が開催されるようになった。これらの芸術祭の多くは、都市や山間部などの広大な野外を会場とし、作品を点在させる展示形式を採用しており、その運営には多数のボランティア参加者が携わっている。本研究は、これら芸術祭にボランティアとして従事する当事者たちを対象とし、その活動内容や参加動機を解明することを目的とした。

本研究を実施するに至った背景としては、日本国内で芸術祭が広範に開催されていたにもかかわらず、従来の研究では地域芸術祭におけるボランティアの役割が十分に吟味されてこなかった、という事情がある。地域芸術祭の研究は、美術史学や芸術批評の立場からは芸術祭の作品の内容について議論された。地域社会学の立場からは、芸術祭と地域コミュニティとの立場から研究された。しかし、いずれの立場においても、ボランティア当事者の視点は十分に検討されておらず、ボランティア参加者の実像や、活動参加の動機、ボランティア活動が参加者にもたらす効果などについて、依然として不明瞭な部分が多い。

さらに、地域芸術祭には、美術系大学の教員や研究室単位で作品を出品する事例が存在しており、それらの作品制作補助や芸術祭会期中の作品受付として、美術系大学の学生がボランティアとして参加している。このように、教室を飛び出して、芸術祭を学びの場として利用する行為は、「産学協同」や「地域創生」などの教育プロジェクトとして散見される。はたして、これらのプロジェクトは学びの場として有効に機能しうるのか、またボランティア体験が学生にとって何らかの教育効果を持ちうるのか。

これらの疑問に対する回答を得るため、研究者は地域外術祭を主な研究対象とする調査を実施することにした。

２．研究の目的

本研究では、研究題目の通り、当初は「美術系大学で学ぶ学生にとって芸術祭ボランティア活動がもたらす影響」を主に調査するつもりでいた。しかし、のちに「研究成果」の項目で詳述するように、研究者が本テーマに関心を持つようになった 2010 年代に、美術系学生のボランティア参加は急速に減退していた。研究者が調査を開始した 2018 年には、美術系学生に代わって、大半のボランティア参加者が、日本国内の社会人と、台湾・香港から長期休暇を利用して来日する若者、と大きく変化していた。この発見自体は研究者にとってひとつの研究成果であったが、同時に研究目的に若干の変更を迫る副作用ももたらした。

以上の事情から、本研究では、研究目的を大きく二種類に大別することにした。第一の目的は、地域芸術祭における様々なボランティア参加者の動機、活動様式、ボランティア活動が参加者に与える心理的・物理的な影響を調査することである。第二の目的は、複数の美術系大学のアートプロジェクトを取材し、その実施における工夫や問題点を調査することである。

３．研究の方法

まず、第一の芸術祭のボランティアの研究としては、日本国内で行われる大規模な国際芸術祭の中から、新潟県越後妻有地域で開催される大地の芸術祭と、瀬戸内海諸島部で開催される瀬戸内国際芸術祭の 2 箇所を選定した。その理由は、数ある芸術祭の中で、これらが日本における地域芸術祭の代表的な存在であり、かつ北川フラムが総合ディレクターを務めるという共通点が在ること、また両芸術祭の運営方法にしばしば「フラム系」と言われる共通項が認められる点である。これらの点に注目し、両芸術祭のボランティア活動に共通して見られる特徴を、その歴史的変遷や他の芸術祭ボランティアとの差異に注目しながら分析することにした。

具体的な研究方法としては、研究者が地域芸術祭のボランティア活動に従事し、活動内容を内部から記録するという、参与観察の手法を採用した。大地の芸術祭と瀬戸内国際芸術祭それぞれのボランティア組織である「こへび隊」と「こえび」隊に登録し、2018 年から 2022 年までの期間に、5 回にわたり計 6 週間のフィールドワークを実施した。現地調査中には、日々のボランティア業務に従事しつつ、その様子をフィールドノートに記録し、また他のボランティア参加者に許可を得た上で自由記述方式のアンケート調査を実施した。さらに、ボランティア参加中に交友関係を確立した一部のボランティア参加者に対しては、フォローアップとしてのインタビュー（対面またはオンライン）を実施した。

次に、第二の美術系大学で行われているプロジェクト形式の実技教育については、複数の美術系大学を選定した。そして、各大学で行われているプロジェクトのアーカイブ調査を実施すると同時に、形式の教育を実施している教員、大学職員、またそれらのプロジェクトに参加した経験のある学生に対するインタビューを実施した。主な取材対象は、尾道市立大学芸術文化学部の小野環准教授が実施する「空き家再生プロジェクト」と、東京藝術大学と取手市、取手市民の三者共同で行われる「取手アートプロジェクト」である。この他に、東北芸術工科大学の「東北画は可能か？」と広島市立芸術大学芸術学部の「光の肖像」についても、資料調査と

関係者への取材を実施した。さらに、個人単位で地域芸術祭に出品している美術系大学の教員に対しても対面でのインタビュー調査を行った。

４．研究成果

本研究により、以下の点が判明した。

(1) 地域芸術祭に参加するボランティアの当事者の変化

本研究で明らかになった、第一の点は、ボランティア当事者の推移である。日本における地域芸術祭の原型となった大地の芸術祭では、そのボランティア組織に多数の美術系学生が参加し、事務局や地域住民と一丸となって芸術祭を作り上げていったことが伝説的に語られてきた。しかし、2010 年代に入ってから美術系学生の割合が低下し、かわりにボランティアの主体となったのが、日本国内の社会人や、また夏季休暇やギャップイヤーを利用してボランティアとして長期滞在する台湾や香港の学生である。

さらに、2020 年代初頭には、コロナ禍において海外からの渡航が不可能となり、また国内からも大人数のボランティアを募集することもできなくなったため、芸術祭開催地域の住民に負担を強いざるを得ない状況も発生した。

(2) 芸術祭初期と現在でのボランティア活動内容の変化

芸術祭ボランティアの活動内容は、芸術祭の運営方法によって大きく異なり、一般的に「標準型」と呼ばれる方式と、それ以外とに大別される。今回の調査で研究者がフィールドワークを実施した、「大地の芸術祭」と「瀬戸内国際芸術祭」は、ともに標準型に分類されることが明らかになった。

標準型の特徴は、中央に運営母体となる指揮系統が存在し、その管理のもとでボランティアが活動するというものだ。研究者が調査した両芸術祭では、ボランティアセンターとなる事務局が存在し、事務局がボランティア活動の受付・登録をし、業務を割り振ることで、初めてボランティアが現地で活動できた。また、作業の大半は、会場に設置された作品の受付・来場者対応業務か、作品の制作補助・メンテナンス業務であり、いずれも事前に準備されたマニュアルに従って手順通りに行動するか、現地担当者の事務局スタッフやアーティストの指示通りに行動するか、のいずれかであった。

もうひとつの重要な点として、標準形を採用するフラム系芸術祭のボランティア形態は、芸術祭ボランティアの一般的な姿とは限らない、ということが指摘できる。フラム系以外でボランティアを活用する芸術祭としては、横浜トリエンナーレやあいちトリエンナーレが存在するが、ボランティア参加者の発案による自主企画や、ボランティアが主体的に運営する作品を展開するなどして、標準型からの離脱を強く志向している。

近年の地域芸術祭では、上述の例のようにボランティア参加者の自主性を重んじる事例が散見される。標準型の採用が、フラム系芸術祭ボランティアの特徴であり、比較的軽微な作業を指示通りに遂行するという簡便さによってボランティア参加の敷居を下げるのに貢献していた一方で、自発的な活動を生まれにくくしていたとも言える。

(3) 地域芸術祭に参加するボランティアの動機づけ

本研究の第三の成果は、ボランティア当事者の参加の動機づけについての知見を得られたことである。フィールドワークおよびアンケートから見えてきたのは、地域芸術祭のボランティア参加者が、「社会のため」や「奉仕」のためというよりも、ボランティア活動そのものに娯楽的な要素を見出し、また他のボランティア参加者との交流を深めていることだ。とくに大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭では、参加者の大半が宿舎で共同生活を送るため、ボランティア同士の交流が活発になり、その交流を目的として毎年のようにボランティアに参加するリピーターを生み出している。

この点には、（２）で記したように、芸術祭のボランティアが標準型を採用していることも貢献している。一日のみの短期から数ヶ月に渡る長期まで自由な日程で参加可能であり、業務内容が比較的単純で参加の敷居が低いことも、リピーターを生み出す要素になっている。

このように、ボランティアとツーリズム体験が組み合わされているという意味では、芸術祭のボランティア参加は、ボランツーリズムの一種と定義できる。主催者側もボランティアが芸術祭をツーリズム空間として利用していることを利用しており。大地の芸術祭 2018 年の報告書には「他地域の芸術祭にサポーターとして参加したことがきっかけで大地の芸術祭を知り、こへび隊として参加する人も見られた。各地の地域芸術祭をきっかけにしたサポーター同士のつながりや交流が生まれつつある」との記述がある[i]。

(4) 大学主体で実施されるアートプロジェクト形式の教育

本研究で明らかになった第四の点は、大学主体で行われるプロジェクト形式の教育の変化である。先行研究では、大学で実施されるアートプロジェクトで、しばしば単位取得や教員からの評価を餌にすることで学生に無償労働を強いる「やりがい搾取」の事例が指摘されてきた。本研究では、それらの批判を受け、各大学の教員がどのように学生のプロジ

ェクトへの参加を実現しているのか、またハラスメント対策をどのように実施しているのかを調査した。

研究者が取材を行った、尾道市立大学の空き家プロジェクトなどでは、現在ではプロジェクトへの参加を単位認定や授業参加の一環としては扱っておらず、あくまでも参加したい学生が主体的に参加を申し込んできた場合にのみ対応する、ということにしていた。また、教員が学生に謝礼金を支払うことで、やりがい搾取と受け取られることを回避する事例も存在した。

一方で、芸術祭と美術系大学の双方において、学生参加者の減少が、過去 10 年で非常に低調になっていることも明らかになった。前述のとおり、芸術祭のボランティアとして自発的に参加する学生が減少していることに加え、大学単位、また大学の研究室単位で実施するプロジェクトにおいても、単位認定や成績評価などの実益と結びつかなくなったことから、参加する学生の数が減少し、教員側としてはプロジェクトの実施・継続に必要な人員の確保に苦労する例も見られた。

---

[i] 大地の芸術祭実行委員会『大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ 2018　総括報告書』（大地の芸術祭実行委員会、2019 年）15 ページ。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 荒木慎也	４．巻 36
２．論文標題 ツーリズムとしての芸術祭ボランティア	５．発行年 2021年
３．雑誌名 多摩美術大学研究紀要	６．最初と最後の頁 115-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荒木慎也	４．巻 115
２．論文標題 大地の芸術祭を支える国際化した「こへび隊」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 アートコレクターズ	６．最初と最後の頁 100-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 荒木慎也
２．発表標題 美大受験教育の諸相
３．学会等名 寄付講座「知恵の庭」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 荒木慎也
２．発表標題 文化受容史としてのデッサン教育
３．学会等名 ルカノーズ（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 荒木慎也
２．発表標題 An Art Festival as a Conflict Resolution Process: the case study of Echigo-Tsumari Art Triennial
３．学会等名 the Twenty-Third Asian Studies conference in Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 荒木慎也
２．発表標題 近代日本の西洋画教育に見る西洋文化の文化混交事例
３．学会等名 第52回アメリカ学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Annetta Alexandridis, Lorenz Winkler-Horacek, Henlik Holm, Natalia Keller, Shinya Araki, Lauren Kellogg DiSalvo, Stephanie Pearson, Adam Rabinowitz, Hannah C. M. Hume, Emma Payne, Charlotte Schreiter, Clara Bolle-Fivaz, Rudiger Splitter, Hadwiga Schorner, Nadine Leisner, Ulfert Oldewurtel, Britta Rabe et al.	４．発行年 2022年
２．出版社 De Gruyter	５．総ページ数 600
３．書名 Destroy the Copy - Plaster Cast Collections in the 19th-20th Centuries: Demolition, Defacement, Disposal in Europe and Beyond	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関